



全国市町村国際文化研修所
学長 藤原 通孝

ポスト・コロナ ウイズ・コロナ

明けましておめでとうございます。昨年は、日本、否世界中が新型コロナウイルス感染症の深刻な影響を受け、対応に苦闘し、そして叡智を振り絞って乗り越えようと努力を積み重ねた1年でした。2021年の新春は、どのような形で迎えることとなるのか。この原稿を書いている2020年10月時点においても尚、見通せない部分が残っています。ただ、間違いなく言えるのは、コロナ以前の世の中とは画然と異なっているであろうということ。「喧噪の中、つばを飛ばして議論しながら酒を酌み交わした、あの居酒屋の時間が懐かしい」というご意見も（あ、自分か）あるかとは思いますが、我々には、コロナ後の世界を生きる（ポスト・コロナ）或いはコロナと共に生きる（ウィズ・コロナ）という選択しかありません。

我々は、この間、どういう行為が危険なのか、どういう方が重篤化しやすいのかといった点について、一定の知見を得ました。これを周知し、情報を共有して、感染の拡大を防ぐことはとても重要です。JIAM（全国市町村国際文化研修所）でも、オンライン研修の試行や様々な感染予防対策に取り組みました。他方、感染を完全に防ぐには、接触や移動を全てシャットアウトするしかありませんが、それは不可能だし、また、それでは社会、経済自体が倒れてしまいます。既に、国民生活の幅広い分野にわたって甚大な影響が出ており、この問題への対応は、今後、短期・中期・長期とスパンを変えて取り組まねばならない重要な課題です。

こうした課題は、コロナに限らず様々なところに存在します。そんな「危機」の時代にあって、地方公共団体、なかんずく住民に最も身近な市町村には、大きな期待が集まります。中には、それを自分たちに言われても、ということもあるでしょう。しかし、対住民という観点からは、その見取り図は持っているに越したことはない。問題全体を俯瞰し、必要に応じて他所（国、都道府県或いは民間機関等々）に振りつつ、自らの役割については十全に果たす。そんな基礎自治体の在り方が求められます。

しかし、未曾有の危機にあって、これは非常に難しい。こういうとき役に立つのが、①「知識」、②「経験」、③「仲間」です。「経験」については、未曾有なんだからそんなものあるはずがないと思われるかもしれませんが、他所の経験、これまでの対応等々、学べる「経験」もたくさんあります。

そして、この①～③を、様々な政策課題について提供するのが、手前味噌ですが、我がJIAMの重要な役割だと考えています。

①「知識」を学び、②「経験」を共有し、③全国に「仲間」をつくる。

JIAMは、今年も、この目的のために努力を重ねたいと思います。

本年もJIAMをどうぞ宜しくお願いします！